

# 水のながれ

永井荷風

青空文庫



戦争後、市川の町はずれにぼくきよ卜居したことから、以前麻布あざぶに住んでいた頃よりも東京へ出るたびたび隅田川すみだがわの流れを越して浅草の町々を行過る折が多くなったので、おのずと忘れられたその時々ときの思出を繰返して見る日もまた少くないようになった。

隅田川兩岸の眺めがむかしとは全然変ってしまったのは、大正十二年九月震災の火で東京の市街が焼払われてからのち後の事で、それまでは向嶋むこうじまにも土手があつて、どうにか昔の絵に見るような景色を見せていた。みめぐりいなり三囲さんい稲荷の鳥居が遠くからも望まれる土手の上から斜に水際に下ると竹屋たけやの渡しと呼ばれた渡場わたしばの棧さんば橋しが浮いていて、浅草の方へ行く人を今戸いまどの河岸かわぎしへ渡してい

た。渡場はここばかりでなく、枕まくら橋はしの二ツ並んでゐるあたりからも、花川はなかわ戸どの岸へ渡る船があつたが、震災後河岸かしどおり通の人家が、一帯に取払われて今見るような公園になつてから言問橋ことといはしが架かけられて、これは今戸へ通う渡しと共に廃止された。上流の小松島から橋場はしばへわたる渡船も大正の初めには早く白鬚橋しらひげばしがかけられて乗る人がなくなつたので、現在では隅田川に浮ぶ渡船はどこを眺めても見られなくなつた。

わたくしはこれらの渡船の中で今戸の渡しを他処たしよのものより最も興味深く思返さねばならない。何故かというと、この渡場は今戸橋の下を流れる山谷堀さんやぼりの川口に近く、岸に上あがるとすぐ目の前に待乳山まつちやまの堂宇と樹木が聳そびえていた故である。しかしこの堂宇

は改築されて今では風致に乏しいものとなり、崖の周圍に茂つて  
 いた老樹もなくなり、岡の上に立っていた戸田茂睡とだもすいの古碑こひも震災  
 に碎かれたまま取除とりのけられてしまったので、今日では今戸橋から  
 この岡を仰いで、「切き風だこの夕越ゆうえ行くや待乳山」の句を思出し  
 ても、むかし味ったようなこの辺あたりの町の幽雅な趣を思返すことは  
 出来ない。むかし待乳山の岡の下には一ひと条とすじの細い町があつて両  
 側に並んでゐる店付の質素な商店の中には、今戸焼の陶器や川魚  
 の佃煮つくだにを売る店があつて、この辺一帯の町を如何にも名所らし  
 く思わせていたが、今はセメントで固めた広い道路となつてトラ  
 ックが砂すなけむり烟けいよを立てて走っている。また今戸橋の向岸には慶  
 養寺うじという古寺があつてここにも樹木が生茂おいしげつていたが、今

はもう見られないので、震災前のむかしを知らない人たちには何の趣もない場末の道路としか見られないようになってしまったのも尤である。平坦な道路は山谷堀の流に沿うて吉原の土手をも同じような道路にしたのみならずその辺に残っていた寺々をも大抵残るものなく取払ってしまった。むかしからの伝説は全く消滅して残る処は一ツもない。

今戸橋をわたると広い道路は二筋に分れ、一ツは吉野橋をわたつて南千住みなみせんじゅに通じ、一ツは白鬚橋たもとの袂に通じているが、ここに瓦斯タンクが立っていて散歩の興味はますますなくなるが、むかしは神明神社の境内けいだいで梅林もあり、水際には古雅な形の石いしど燈籠とうろうが立っていたが、今は石炭を積んだ荷船にぶねが幾艘いくそうとなく繫つなが

れているばかり、はしむこう橋 向にある昔ながらの白鬚神社や水神すいじんの  
ほころ祠の眺望までを何やら興味の無いものにして無理はない。  
 向嶋の堤防はこの辺までも平に地ならしされて、同じように自働  
 車やトラックの疾走する処にしている。ひやつかえん百花園は白鬚神社の背  
 後にあるが、貧し気な裏町の小道を辿って、わざわざ見に行くに  
 も及ばぬであろう。むかし土手の下にささやかな門をひかえた長ち  
ようめいじ命寺の堂宇も今はセメント造づくりの小家こいえとなり、境内の石碑は一つ  
 残らず取除かれてしまい、牛うしの御前ごぜんの社殿は言問橋ことといばしの袂に移さ  
 れて人の目にはつかない。かくの如く向嶋の土手とその下にあつ  
 た建物や人家が取払われて、その跡が現在見るような、向嶋公園  
 と呼ばれる平坦な空地になったのだ。これは荒川の河流が放水路

の開通と共に、如何に險惡な天候にも決して汎濫はんらんする恐れがなくなつたためかとも思われる。吉原の遊廓外くるわそとにあつた日本堤の取崩されて平かな道路になつたのも同じ理由からであらう。実例としては明治四十三年八月に起つた水害の後、東京の市民は幾十年を過ぎた今日こんにちに至るまで、一度も隅田川の水が上野下谷したやの町々まで汎濫して来たような異変を知らない。その代り河水はいつも濁つて澄むことなく、時には臭氣を放つことさえあるようになったのも、事に一利あれば一害ありで施すべき道がないものに見える。浅草の観音菩薩かんのんぼさつは河水の臭氣をいとわぬ参詣者さんけいしやにのみ御利益ごりやくを与えるのかも知れない。わたくしは言問橋や吾妻橋あずまばしを渡るたびたび眉を顰ひそめ鼻を掩おおいながらも、むかしの追想を喜ぶ



あまり欄干らんかんに身を倚よせて濁った水の流を眺めなければならない。  
水の流ほど見ているものに言い知れぬ空想の喜びを与えるものはない。  
薄く曇った風のない秋の日の夕暮近くは、このみならず  
何処いずこの河、いずこの流れも見するには最もよき時であろう。江戸時代からの俗謡にも「夕暮に眺め見渡す隅田川……。」というのがあつたではないか。



# 青空文庫情報

底本：「荷風隨筆集（上）」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年9月16日第1刷発行

2006（平成18）年11月6日第27刷発行

底本の親本：「荷風隨筆 五」岩波書店

1982（昭和57）年3月17日第1刷発行

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2010年3月8日作成

2019年12月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 水のながれ

永井荷風

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>